

アーサー・コナン・ドイル作

伊豆野 良江訳

クランバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izumo

第八章 イズレール・ステーキスの証言

フォザギル・ウエストの旦那と牧師様から、ヘザストーン將軍やそのお屋敷のことを全部話せつて言われただ。おらのことは誰も知りたがねえから、あんまり話すなつていわれたけど、そうは思わねえ。ステーキス家うちゅうのは、ここら一帯じゃ有名で、尊敬されてる家だ。ニスデールでもアナンデールでも、ステーキス家のせがれの知らせとくりや、みんな聞きたがるにきまつてる。

だけど、まあしょうがねえ。おらがウエストの旦那のために骨折つたことをよく覚えといてもらいてえもんだ。おらは字が書けねえ。おやじは、おらに一日中カラスの番ばっかさせて、学校にや行かせてくれなかった。そのかわり、教会の教えはみっちり仕込まれたから、きつと神様はほめてくださるにちがいない。

去年の五月だあ、町で管理人のマクニールの旦那に会つたのは。御者と庭師と一緒にやる仕事があるけど、やらないかと聞かれただ。ちよつとそげな仕事を探しているときだつたけど、すぐに食いつきたかあなかつた。

「別に無理には言わない」旦那はするがしこそつに言つただ。「これだけいい仕事だつたら、やりたいやつはわんさかいるからな。もしやりたいなら、明日の午前中におれの事務所に来るんだな。雇い主が来るから、いろいろ聞けるだろう」

それしか言わねえんだ。ほんとに抜け目ねえこつた。そうやって金ためたつて、来世じゃろくなこたあねえな。最後の審判の日じゃ、管理人たちやわんさと神様の左に座らされるだろうけど、マクニールの旦那もそこにいるだろうよ。

で、おらが次の朝事務所に行くと、マクニールの旦那といっしょにひよろつと背の高い白髪の旦那がいたんだあ。こわい顔をしてクルミみてえに茶色くてしわだらけで、おらをぎらぎらした目で見て、こつ言つた。「お前は、こここの生まれかね」

「へえ、ここから出たこたあねえです」

「スコットランドから出たことがないんだな？」

「カーライルの市に二回行ったことはあるけど」おらは嘘は嫌いだから、そう言つ

た。それにマクニールの旦那が思い出し出してくれると思つたんだ。ドラムルー農場で入用の子牛三頭を手に入れてくれと、旦那に頼まれたからな。

「マクニールから聞いたが」とヘザストーン將軍は言った。この旦那がヘザストーン將軍だつただ。「おまえは字が書けんそつだな」

「へえ」

「読むのもだめか？」

「へえ」

「どうやら探していた男がみつかつたようだ。近頃の使用人はくだらない教育のおかげで、すっかりだめになりおつた。ステークス、その点おまえは合格だ。賄いつきでつき三ポンドやろう。ただし、いつでも二十四時間前に解雇通告ができるという条件付だ。それでいいかね？」

「前んとは、違つたけんどな」おらはちよつと難しい顔をして言つてやつた。だけれんど、それはほんとのことだ。農場のスコットさんとこじゃ、月一ポンドで、日二回オートミールにありつけるだけだもんな」

「よし、よし、それじゃ、お前の働き次第で、給料をあげてやろう。これは手付金の一シリングだ。最初に払うようマクニールに言われたからな。じゃ、月曜にクルンバーに来てくれ」

「それで、おらあ月曜にクルンバー館に出かけていった。お屋敷のでけえこと。窓は百個くれえあつて、ここらの住民が半分は入れるにちげえねえ。

庭師の仕事つて言つても、そんな手がかる庭じゃねえし、馬もつなぎっぱなしで、御者の仕事もねえんだ。それでも、結構忙しかった。塀を作る仕事がしこたまあつたし、ナイフを研いだり、靴をみげえたりな。どちらかといやあ、婆さんの仕事さあ。

「台所じゃ、他にコックのイライザと女中のメアリつてというのがいたんだけど、これが二人そろつて大ばかもんでよ。ロンドンに住んでたつちゅうのに、世の中のことも人間のこともなあんも知らねえんだ。

だもんで、こつちから話しかけることはなかつたさ。英語もほとんどわからねえしな。魂のことより藪のキツネの方が気になるつちゅう連中だあ。イライザはジョン・ノック又さま(十六世紀スコットランドの宗教改革者)のことをたいした人じゃないとぬかすし、メアリはメアリで、六ペンス払つてまでドナルド・マクスノー牧師さまのお説教を聴きに行く気はしないと云いやがる。こつちう始末におえねえ奴は、神様にお任せするしかねえ。

「ご家族は四人で、旦那様と奥様、そしてモーターントお坊ちやま、ガブリエルお嬢様。すぐに何か普通じゃないつて気づいただ。奥様は幽霊のようにやせて青白くつて、しよつちゅう一人で泣いていらつしやる。木立を行つたり来たりしてな、人目のねえ所で気が狂つたように手をもんだりするのを、おらあ見た。

お坊ちやまやお嬢様も何か心配事があるみてえだつたな。それでも明るい顔のときも

あつたけど、一番ひでえのは旦那様だ。いっつも暗くて悲しそうな顔してる。まるで首に縄を巻かれた囚人みてえにな。

おら、いつたいこの家はどうしちまったのかって、台所の二人に聞いてみた。だけんどイライザは「ご主人のことに首突っ込むもんじゃねえ。自分の仕事してもらつもんをもらつてれば、そんなこたあどうでもいい」って言いやがる。まったく、どうしようもねえ連中だ。こつちが頭さ下げて聞いてんのに、教えてくんねえんだ。そんどのに、何かあると、ぺちゃくちゃしゃべってるくせにな。

それから数ヶ月過ぎると、屋敷ん中はおつとひどくなつたんだ。旦那様はぴりぴりしていなさるし、奥様は毎日ふさぎこんでおられる。といつても、夫婦喧嘩があるつちゅうわけじゃねえ。おら、朝飯のとき、お二人の話を聞いてちまつたんだ。窓際のバラの枝を刈り込んでいてな、いやでも耳にへえってくるつちゅうわけさ。

お坊ちやまやお嬢様がおられるときやあ、あんまりしゃべることはねえが、お二人だけになると、ていへんな災難でもふりかかってくるみてえな話をなさる。それがなんなのかは、おらにはわからなかつたけんどな。

「死ぬのはこわくない。どんな危険だつて立ち向かつてみせる。しかし、こつちやつていつ来るかわからないものを待つんでは、気力ももたん」旦那様がこつちの何を何度も聞いたんだよ。そのたんびに、奥様が「取り越し苦労かもしれませんよ。最後は正しいものが勝つんですから」って慰めの言葉をおかけになつても、旦那様の耳にはてんで入つちやいねえんだ。

お坊ちやまとお嬢様といやあ、すぎさえあれば家を抜け出して、ブランクサムのウエストさんとこに行つてたこと、おらあ知つてるだ。將軍は自分のことで頭がいっぺえで、気づかねえ。だけんど、おらが口出すことでもねえしな。旦那様はご存知ねえようだけんど、わけえ者にしちやいけねえつて言つたら、ぜつてえその逆になるもんだ。神様は楽園の二人がそうなるのを御覧になつた。ウイグタンだけ違つたああるめえ。

それと、まだ言つてねえことが一つあつて、それをこれから話さなければなんねえ。將軍の部屋は奥様とは別で、他の家族からうんと離れた、屋敷で一番奥の部屋に一人でお休みになつてた。ベッドを整えたり掃除することまで自分でやつて、部屋を出るときは必ず鍵をかけて誰にもへえらせねえ。部屋に通じる廊下にだつて、近寄らさなかつたくれえだからな。

夜になると、旦那様は家ん中歩き回つて、どこもかしこも明かりをつけさせて、まっぴるまみてえに明るくしちまうんだ。

おらの部屋は屋根裏にあるんだけど、真夜中から明け方までずっと、廊下を行つたり来たりする足音が聞こえる。その音が耳について眠れねえのは、ちつとこたえた。旦那様はほんとにいかれちまつたんだらうか、それとも、インドの異教徒がやる偶像崇拜の儀式かなんかを真似してるんだらうかって、おらあ思った。きつと良心が虫に食い荒らされているに違いねえ、マクスノー牧師さまに告白されたらうんと楽になるから、お

勧めしようかとも思った。だけれんど、おらの思い過ごしかもしんねえし、まちげえを起こしそつなお人じゃねえしな。

ある日、庭の植え込みで仕事していると、どんな様が来て言ったんだ。「イスレール、お前ピストルを撃つたことがあるか？」

「とんでもねえ。そんなもん、触つたこともねえです」

「それなら、いまさら習つても仕方あるまい。人それぞれ得意な武器があるもんだ。お前には棍棒なんかを持たせたら、役に立ちそつだな」

「そつだあ、この辺じゃ、誰にも負けねえ」おら、つい余計なことを言つちまつた。

「ここは田舎の一軒家だ。いつ何時、悪党に襲われるとも限らんから、常に用心をする必要がある。わしとお前、モーター、それにフランクサムのウエスト君もいざといつとき駆けつけてくれる。これだけそろえば心強いが、お前はどつだね」

「そりゃ、あんまし物騒なこたあしたくねえが、月に一ポンド上げてもらえりゃ、何でもやるけん」

「そんなことをくたくだ言つつもりはない」旦那様はそつ言つて、あつさり年に十二ポンド割り増してくれた。おらは何でも悪かあ考えねえほうだけれんど、そんなに簡単にくれるつちゆうことは、まつとうな金じゃねえなと、そのとき思った。

おらは何にでも首を突つ込むたちじゃねえ。けれど、將軍がなんで夜中眠らねえで歩き回つていなさるか、知りたくてたままなくなつた。

ある日、廊下を掃除していたときのことだ。旦那様の部屋に近い隅っこに、カーテンの古い絨毯だのが山になつてるのを見つけて、うめえこと思いついた。今夜この後ろに隠れてたら、將軍が何してるかわかるんでねえか。見つかることはあんめえつてな。考えれば考えるほど、たやすいことに思えてきたんで、実行することに決めた。暗くなつて、おらは女どもには齒がいてえから、早く部屋にさがると言つた。いつた部屋に行つちまえば、誰にも邪魔されることはねえ。みんなが寝静まるまでちつと待つてから、靴を脱いで階段を駆け下りていった。古布の山んこで、おつきいぼる絨毯をひつかぶつて横になつて、隙間から片目だけ出してた。

そこでネズミみてえに縮こまつてると、旦那様がそばを通つて、自分の部屋に入へつてた。家ん中はしいんとしたな。ああ、おらあ、銀行の有り金全部もらつたつて、もう二度とあんなこたあ真つ平だ。思い出すたんびに身の毛がよだつちまつ。

あんなところでじいつと待つてるほど、嫌なこたあなかつた。おつそろしく静かで、どこかで柱時計がカチカチ鳴つてる音だけしかしねえんだ。

おら、廊下の左見ではまた右見てつてな具合に注意してた。片つぽ見てるうちに、もう片つぽから何かがやつてきそつな気がしてな。そのうち額から汗は流れてくるし、心臓は時計の倍くらいの速さでバクバクいいだした。そんでも、一番てえへんだつたのはカーテンなんかの埃を吸い込んじまつて、咳が出そつになるのをこらえなきゃなんねえことだつた。

冗談じゃねえ！あんなことがあったら、髪の毛が真っ白くなつたっておかしくねえ。グラスゴアの市長にしてくれると言われたって、二度とゴメンだ。それで、夜の二時か、それよりちつと過ぎた頃だ。結局何にも起こりなかつたけれど、まあそれでよかつたかもしんねえ、おらがそう思ったそんなとき、夜の静けさ破つて、はつきりした音が聞こえてきた。

前にもその音んこと聞かれたことあるけれど、何て言つたらいいかわかんねえんだ。今まで聞いたことのねえ音、ワイングラスのふちを弾いたみてえな、チンっちゅう鋭い音。いんや、それよりもつと高くか細い音だ。それに天水桶に雨水がピシャツとはねるような音も混じつた。

おら、ゾーっとして、葉っぱの中にいるガマガエルみてえな格好で、じつと耳をすました。だけど、遠くで時計がチクタクいう音しか聞こえてこねえ。

しばらくすると、いきなりまた同じ音が聞こえた。甲高くつて、耳ざわりな音はつきり。旦那様もその音を聞いたにちがいない。うなされて目が覚めるみてえな、「うん」ちゅうつなり声が聞こえたからな。そのあと、ベッドからおりて服を着る音がして、へやん中を歩き回る音が聞こえてきただ。

てえへんだ！おら、あわてて絨毯の中にもぐりこんだ。ガタガタ震えながら、思いつく限りお祈りを唱えた。それでも、旦那様の部屋のドアからは一時も目を離さねえでいた。

すぐにつ手手を回す音がして、ドアがゆっくり開いた。部屋ん中まぶしく見え明るくて、剣みてえなもんが壁にいつべえ並んでたのが、チラツと見えた。旦那様は部屋を出てドアを閉めた。赤いスモークキングキャップにガウンを羽織つてな、先んところが上がった、かかとのねえスリッパはいてただ。

最初は寝ぼけてんじゃねえかと思つただ。でも、近づいてきたんでよく見ると、目はぎらぎらしてるし、これ以上の苦しみはねえって顔してた。あの青い顔してひよろつとした姿が、しんとしたなげえ廊下をやってくるのを思い出すたんびに、身震いがしちまつ。

おら、息を殺してじつとみつめてた。それで、すぐそばんところまで来たとき、心臓が止まりそうになつた。あのチンチンちゅう音が聞こえたんだ。今度は耳のそばでつかはつきりとな。

いつてえどこで鳴ってるのか、何の音なのか、不思議でなんねえ。旦那様が出したんだと思つたけれど、そんなはずはねえ。手にも何も持ってねえし、横に垂らしてたしな。それでも、旦那様ん方から聞こえてきたつてことだけは、間違いないんだ。頭ん上から響いているような気がしたけれどな。とにかく甲高い、気味わりい音だつた。

旦那様にもその音が聞こえてるに違いねえが、ずんずん歩いていつて見えなくなつちまつた。おら、逃げるなら今だと、隠れてたところから這い出して、自分の部屋に逃げ込んだ。もつ、紅海のお化けがみんな勢ぞろいすると聞いたつて、覗きに行こつて気に

やなんねえな。

おらが見たこたあ誰にも言わなかつたけど、こん屋敷からいちんちも早く逃げ出すと決めただ。そりや月四ポンドはいい話だけど、年中肝冷やしてんじや割りにあわねえ。まだ命は惜しいしな。相手が悪魔だとすりや、どんな罫仕掛けてくるかわかんねえ。神様は悪魔より強いはずだけど、わざわざそれを試すこたあないさ。

旦那様の一家が呪われているつちゆうことは、はつきりわかつた。なんかの報いを受けたんだろつから、仕方ねえかもしんねえが、おらみてえに正しい道を歩いてる信者にとつちや、とんでもねえ話だあ。

そんでも、ガブリエルお嬢さんのことを思うと、胸が痛くてな。気立てがよくつてかわいい娘さんだつたけど、人のことどころじゃねえ。罪ぶけえソドムの町を出てつた口トみてえに、おらもこん屋敷出て行くつと思つた。

それからつちゆうもの、チンチンいう音が耳について、怖くて廊下も一人で歩けねえ始末だ。そんで、旦那様にお暇をいただきつかけはねえか、どうやって切り出そうかつてそればつか考えてただ。毎日、キリスト教徒の入る所に戻りてえ、すぐ近くに教会のある所に行きてえつてな。そしたらな、神様の思し召しかもしれねえが、おらが言い出す前に旦那様から暇を出されたんだあ。

十月へえつてすぐのことだつた。馬にカラスムギやつて厩から出てくつと、大きな男が片足でびよんびよん道をやつてくる。人間つて言つより、でつけれカラスの化け物みてえだつたな。

おら、旦那様の言つてた悪党つちゆうのはこいつのことにちげえねえと思つた。そんで、一発お見舞いしてやろつと棍棒持ち出した。おらが向かつてくるのを見ると、やつはポケットから長いナイフを取り出した。きつと、おらの顔つきとか、棍棒を見てこつちの考えを読んだんだな。てめえ、引つ込んでねえとぶつ殺すぞ、とぬかしやつた。

あの野郎が使つた言葉つたらよ、聞いただけで髪の毛が逆立つくれえ、おつそろしく罰当たりなもんだつた。あんどき天罰があたらなかつたのが、不思議なくれえだ。

そいつはナイフ、おらは棍棒を持ってにらみ合つていたところに、旦那様がやつてきた。たまげたのなんのつて、古くからの知り合いみてえにその野郎に話しかけたじゃねえか。

「伍長、ナイフをしまえ。頭がおかしくなつたのか？」

「くだばつちまえ！おれがナイフを出さなきや、頭がおかしくなるどころか、ぶち割られてたところすぜ、こんな老いぼれのくそ野郎なんか、おん出したほつがいいですよ」

旦那様はむつとしたように顔をしかめた。あんな野郎からどうこつ言われるのが、気に入くわねえみてえだつた。それからおらの方を向いて言つたんだ。

「イズレール、お前には今日限りで暇を出すことになつた。よく働いてくれたし、不満があるわけじゃない。こつちの事情があつてな」

「へえ」

「今晚出て行ってくれんか。急なことですまんが、その分給料を一月分上乗せするか
らな」

そう言うと、伍長ちゆう男を連れて、家ん中にへえっちまった。それっきり、二人には一度も会ってねえ。給料は封筒に入れて届けてくれた。おら、コックと女中に別れの言葉と一緒に、神様の罰が下る日がきつと来る、ルビーなんかより価値のあるもんがあることを覚えとけて言っちゃったんだ。それで、クルンバー館とは永遠におさらばしたちゆうわけだ。

フォザギル・ウエストさんから、意見は言わなくていいから、見たことだけを話せて言われただ。なんか考えがあるにちがいないえ。あの家の人たちが悪人だっていうつもりはねえよ。だけど、こんだけは言つときてえんだが、あのことが起きたとき、おら、ちつとも驚かなかった。思ったとおりだったってことは、マクスノー牧師様にも申し上げたことだ。

これで、もつおらの話はおわりだ。付け加えることも、言い直すこともねえ。牧師様、おらの話を書き取ってくださいあってありがとござえました。何か聞きてえって人がいたら、おらエックルフェツカンじゃ顔が知れてるし、ウィグタンの管理人マクニールさんに聞きゃ、居所はすぐわかるはずだあ。